

美術科

美術科の本質

美術科の本質とは、

造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成すること

(新学習指導要領から)

「何ができるようになるのか」

美術科が担う新しい時代に必要となる資質・能力

学びに向かう力、人間性

- ・学習に主体的に取り組む態度
- ・美術を愛好する心情
- ・豊かな感性や情操など

知識及び技能

- ・造形的な視点を豊かにするために必要な知識 →〔共通事項〕
- ・表現における創造的に表す技能

思考力・判断力・表現力等

- ・表現における発想や構想
- ・鑑賞における見方や感じ方など

学習課題

「何を学ぶか」

美術科の学習内容

- ・感じ取ったことや考えたことなどを基にした発想や構想
- ・目的や機能などを考えた発想や構想
- ・発想や構想をしたことなどを基に表す技能
- ・美術作品などに関する鑑賞
- ・美術の働きや美術文化に関する鑑賞
- ・形や色彩などの性質や感情にもたらす効果の理解
- ・全体のイメージや作風などで捉えることの理解

「どのように学ぶか」

美術科の学習過程・学習方法

- ・主体的な学び
美術を学ぶことに対する必要性を実感し目的意識を高める
- ・対話的な学び
言語活動の充実を図り、お互いの見方や感じ方、考えなどが交流され、新しい見方に気付いたり、価値を生み出したりする
- ・深い学び
造形的な見方・考え方を、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげる

美術科の本質について

美術科の本質は、新学習指導要領（平成29年3月公示）の美術の目標にある通り、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、「造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成すること」であると考えられる。「造形的な見方・考え方」とは、感性や、想像力を働かせ、対象や事象を、造形的な視点（形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点）で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすことである。こうした美術の特質に応じた物事を捉える視点や考え方を働かせて学習していくことで、漠然と見ているだけでは気付かなかった形や色彩などの働きに気付いたり、作品等からよさや美しさ、面白さ等を感じ取ったり、新たな意味や価値を発見したりすることができるようになるであろう。それは、中学校を卒業した後も、将来美術に関わる仕事に就く、旅先でスケッチを描く、美術館で好きな作品を鑑賞する、美術文化遺産を見るために寺院を訪れる、文房具や服等を買う時に形や色などデザインにこだわる、夕日の赤と空の青のグラデーション等自然に見られる造形の美しさに感動するなど、生活や社会の中の様々な美術や美術文化と豊かに関わっていくことにつながるということである。この本質に迫るために美術科で育成する資質・能力は以下の通りである。

美術科で育成する資質・能力

左図の「何ができるようになるのか」が美術科で育成する資質・能力であり、美術科でなければ育成できない資質・能力ともいえる。

「知識及び技能」は、“社会の中で生きて働く”知識及び技能のことであり、造形的な視点を豊かにするために必要な知識として〔共通事項〕が位置付けられている。これは、表現及び鑑賞の活動を通して、対象や事象を実際に捉える中で、実感的に理解することが重要である。また創造的に表す技能は、自らが発想や構想したことに基に、表し方を創意工夫し、創造的に作品を作り上げていく際に働く資質・能力である。

「思考力・判断力・表現力等」は“未知の状況にも対応できる”思考力・判断力・表現力等のことであり、「造形的なよさや美しさ、意図と表現の工夫、美術の働きなどについて考え」ることが発想や構想と鑑賞の双方に重なる資質・能力である。造形的なよさや美しさ、意図と表現の工夫、美術の働きなどの学習の中心となる考えを明確にすることにより、鑑賞で学習したことが発想し構想を練るときに生かされ、また発想や構想に関する学習で学んだことが鑑賞において見方や感じ方を深める学習に生かされ、それぞれの資質・能力を高め、一人一人の生徒の創造的な「思考力・判断力・表現力等」を育成することにつながる。

「学びに向かう力、人間性」は、“学びを人生や社会に生かそうとする”学びに向かう力、人間性のことであり、「知識及び技能」や「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力を、どのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素である。「学びに向かう力、人間性」を育てていくために、表現活動においては、自分が表現したい主題を自分の表現方法で創意工夫し実現していくことが大切である。また、鑑賞活動においては、自分の見方や感じ方を基に、美術や美術文化に対する見方を深めたり、自分としての新しい意味や価値を作り出したりしていくことが大切である。すなわち、自己決定を積み重ねて自己実現を果たし、創造活動の喜びを繰り返していくことで、主体的に取り組む態度が高められ、さらには美術を愛好していく心情、そして豊かな感性や情操へとより高次の資質・能力が培われていくということである。

美術科の本質に迫る授業づくり

このような資質・能力を適切に生徒に育成していくために、生徒の実態を把握した上で、育成したい資質・能力を明確にし、教科の学習内容（左図「何を学ぶか」）に関する適切な学習課題（左図「学習課題」）を設定する必要がある。つまり、育成したい資質・能力を見据えた学習課題を設定することが大切なポイントである。また、学習課題の追究・解決を通して生徒に資質・能力を育成するには、学習過程・学習方法（左図「どのように学ぶか」）を適切かつ効果的に設定することも大切なポイントである。主体的・対話的で深い学びを意識した学習過程・学習方法を設定することで美術を学ぶ必要感や目的意識を高め、自他の言語活動を充実させることで新しい見方や価値を生み出すことへつながり、それが造形的な見方・考え方を豊かにし、それらを習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることで、より質の高い深い学びへとつながっていくと考える。

実践事例 1

1 題材名

第1学年 君は何を感じる？

ーゴッホの作品の魅力を探ろうー

【B鑑賞（1）ア】〔共通事項〕ア、イ

2 美術科の本質と本実践の関わり

本校美術科では、美術科の本質を「造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成すること」であると考え、次のように研究仮説を設定した。

＜美術科の本質に迫る授業づくりのための研究仮説＞

表現活動における発想や構想、鑑賞活動など感性を働かせて思考・判断・表現していく場面において、造形を捉える視点として〔共通事項〕に関わる問いかけを行うことで、生活や社会の中の美術の働きや美術文化についての実感的な理解を深めることにつながる。

本実践は鑑賞領域の題材の実践であり、この領域では、美術科で育成する資質・能力の中でも造形的な視点を豊かにするために必要な知識を身に付け、鑑賞における自分の見方や感じ方を大切にして、美術や美術文化に対する見方を深め、自分としての新しい意味や価値をつくりだすなど、自己決定を積み重ねて自己実現を果たし、創造活動の喜びを繰り返していくことで、主体的に取り組む態度を高めるといった資質・能力を育成する部分が大きい。そこで、鑑賞活動で育成したい資質・能力を効果的に育成するため、前述の本校美術科の研究仮説を基に、この題材における具体的な仮説を設定し、実践を行うことにした。以下が、本実践における仮説である。

「ゴッホの作品から光の輝きや鮮やかさが感じられるのはなぜだろうか」と問うことで、造形的な要素の中でも色彩が作品に与える印象やイメージを捉えさせ、色彩や配色の効果に気付かせることができる。

3 題材の目標

- 形や色彩、構図、描き方などの特徴や印象、よさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などに関心をもち、主体的に感じ取ろうとしている。
(美術への関心・意欲・態度)
- 形や色彩、構図、描き方などの特徴や印象、よさや美しさ、作者の心情や意図、表現の工夫などを感じ取り、自分の思いや考えをもって味わっている。
(鑑賞の能力)

4 題材構成（全3時間）

次	学習活動	配時
1	○ゴッホの「種まく人」とミレーの「種をまく人」を比較鑑賞する ・「種まく人」と「種をまく人」を比較することで、作品から感じられる印象やイメージの違いと造形的な要素の関わりについて探る。	1
2	○ゴッホの「夜のカフェテラス」とドガの「カフェ・コンソール（犬の歌）」を比較鑑賞する ・「夜のカフェテラス」と「カフェ・コンソール」を比較することで、作品から感じられる印象やイメージの違いと造形的な要素の関わりについて探る。	1
	○ゴッホの「夜のカフェテラス」とドガの「カフェ・コンソール（犬の歌）」を比較鑑賞する ・「夜のカフェテラス」と「カフェ・コンソール」を比較することで、ゴッホの作品から光の輝きや鮮やかさが感じられる理由を探る。	1

5 実践内容

（1）題材設定の趣旨

鑑賞活動は、自分の見方や感じ方を大切にして、造形的なよさや美しさなどを感じ取り、表現の意図と工夫、美術の働きや美術文化などについて考えるなどして、見方や感じ方を深めるなどの鑑賞に関する資質・能力を育成する活動である。それは、知識なども活用したり、他者の考えなども聞いたりしながら、様々な視点や考えをもって作品を捉え、自分の中に新しい意味や価値をつくりだす創造的な活動である。このような資質・能力を育成することは、生涯にわたり美術を

愛好する心情や美術文化の継承と創造への関心、生活や社会の中の美術と主体的に関わる態度など、学校教育にとどまらず、将来的に社会をよりよく生きるために必要な態度を養うこととなり、中学校美術科が目指す豊かな感性や情操を培うことにつながる。

本題材では、フィンセント・ファン・ゴッホ (1853-1890) のアルル時代 (1888-1889) に描かれた作品とそれらに似た場所や場面の他の画家の作品を比較鑑賞し、ゴッホの作品に見られる光り輝く色彩の美しさについて探っていく。オランダで生まれたゴッホは、北国の重く暗い光を反映した作品を描いていたが、南フランスのアルルに移り住んでからは、輝く太陽の強い光に魅せられて鮮やかな色や力強いタッチなど、現在評価されているゴッホ自身の描き方を獲得することになる。彼はただ感情的に筆を走らせていたわけではない。友人のフランス人画家、エミール・ベルナール (1868-1941) の回想には、ゴッホが毛糸のような身近な材料を用いて色彩の対比や組み合わせを考えるなど、色彩理論を理解し作品に取り入れていたことが分かる記述がある。より鮮やかに、より光り輝く作品を描くために、ゴッホがどのような色彩の工夫を行ったか理解するには、似た場所や場面の他の画家の作品を比較して鑑賞することで、それぞれの作品の印象やイメージに関わる造形的な要素の違いが明確に見えてくるだろう。生徒一人一人の見方や感じ方を大切にしながら、美術ならではの造形的な見方・考えから作品を捉えていき、さらに他の生徒との対話を通して、それぞれの生徒の思いや考えを聞くことで、生徒の見方や感じ方を広げていくことにつなげていきたい。

第1次では、ゴッホの「種まく人」(1888) とミレー (1814-1875) の「種をまく人」(1850) を比較鑑賞する。ゴッホの「種まく人」は、ミレーの「種をまく人」に由来する作品である。ゴッホは自らの理想とする姿をミレーに投影していて、ミレーの作品の主題を自作に応用した。ミレーの作品は、農村で働く人々を主題とした作品で、今回取り上げる作品は種をまく人一人だけを主役に、逞しい体躯を画面いっぱいに堂々と描いている。暗く穏やかな色調からは農村の貧しさや静謐さが感じられる。それに対し、ゴッホの作品はミレーと同様の主題ではあるが、黄色く光り輝く太陽

がともに描かれている。主題の種をまく人はポーズが変えられ、画面に占める面積も小さく、あまり躍動感を感じられない。しかし、色彩の面では太陽の黄色や地面の青とオレンジのタッチが対比の効果となり、鮮やかな情景が印象的な画面となっている。2点を比較鑑賞することで、ゴッホとミレーの作品から感じられる印象やイメージの違いと造形的な要素の関わりについて探っていき、形や色彩、構図、描き方などの造形的な要素の働きを理解したり、それぞれの作者の特徴や表現意図について明らかにしたりするなど、深い学びに至る鑑賞活動にしていきたい。

第2次では、ゴッホの「夜のカフェテラス」(1888) とドガ (1834-1917) の「カフェ・コンソール (犬の歌)」(1876-77) を比較鑑賞する。「夜のカフェテラス」は夜の空を青色で描き、その中でカフェに黄色い明かりが灯っている情景を描いた作品である。カフェから漏れた光が地面に当たり、薄っすら橙色に光る道や空には黄色く輝く星も見える。カフェテラスや道には人の姿も見え、穏やかな黄色い光も相まって、暖かく柔らかな雰囲気に包まれている。この作品は黄色・橙色と青色の補色の効果を生かし、夜であっても色彩の美しさや鮮やかさを画面に表したゴッホならではの作品といえる。一方、「カフェ・コンソール」は、夜のカフェで歌う女性の姿を描いた作品である。背景には緑の木と丸い白い光がいくつも見える。歌う女性にも白い光が下から当たっており、暗闇の中で浮かび上がる姿は不気味ささえ感じる。この2点を比較鑑賞することで、第1時ではそれぞれの作品の印象やイメージの違いがどのような造形的な要素に関わっているのか探るとともに、第2時では特に色彩に注目して鑑賞させ、ゴッホの作品から光の輝きや鮮やかさが感じられる理由を考えさせたい。

6 指導上の工夫

(1) 美術科の本質に迫る学習課題や問いの設定

第2次の学習課題を「ゴッホの作品のよさや美しさとは何だろうか」とし、第1時では、ゴッホの「夜のカフェテラス」とドガの「カフェ・コンソール」を比較鑑賞し、作品から感じられる印象やイメージを挙げていくことで、生徒によって感じ方や捉え方が様々あ

ることに気付かせ、鑑賞に対する興味や関心を高めていく。そして、似た題材でも、それぞれの作品から受ける印象が違うことに気付き、それがどこに由来するのかを探っていくことで、それぞれの作品に見られる形や色彩、構図、描き方などの造形的な要素における表現の違いによるものと自覚できるだろう。さらに第2時では「ゴッホの作品から光の輝きや鮮やかさが感じられるのはなぜだろうか」と問うことで、造形的な要素の中でも色彩に視点を当てて作品をさらに深く見ていくことにつながると考える。その中でもう一度、ドガの作品と比較して見たり、資料として提示する様々なカラーバリエーションの「夜のカフェテラス」を見比べたりしていくことで、色彩が作品に与える印象やイメージを実感的に理解することができ、色彩や配色の効果に気付かせることができると考えた。そして、ここで獲得した色彩の視点は、これからの美術の創造活動にも生きてくるのではないかと考える。

(2) 鑑賞の手がかりとしての資料と時間の充実

提示する図版は黒板だけではなく、生徒個人にもカラーの図版を配布することで、個人やグループ活動など、いつでも鑑賞の手がかりにできるようにする。また、個人で鑑賞する時間や互いに感じたことをグループで説明し合う時間を確実に確保し、作品との対話や生徒同士の対話ができるようにして、それぞれの場面で考えを巡らせられるようにする。

(3) 自分の見方や感じ方を広げるワークシート

それぞれの作品ごとに感じ取った印象やイメージと造形的な要素の関わりが構造的に理解できるワークシートの内容を考える。そうすることで、ワークシートを手がかりに、それぞれの作品から感じた印象やイメージを、他の生徒に根拠をもって説明することができる。また、聞く生徒にとっても内容を理解しやすくなり、他の生徒の違った見方や感じ方を把握することができ、生徒自身の見方や感じ方を広げることにつながるだろう。他にも、ワークシートに自分の思いや考えを記入する際には、自分の考えを黒色、他の人の考えを聞いて納得のいったものは青色、自分の考えを更新するときには赤色といったルールを示すことで、

生徒自身が自分の考えの変容を確認できるようになると考える。

ワークシート(第2次)の形式は以下の通りである。

1 目次 鑑賞
君は何を感じる? —ゴッホの作品の魅力を探そう— 姓 名 氏名

鑑賞する作品
・色紙の大きさ・・・青色
・色紙の枚数・・・青色
・色紙の枚数・・・青色
・色紙の枚数・・・青色

作品から感じたこと (第一印象)
ゴッホの作品のよさや美しさとは何だろうか。

① 第一印象・・・それぞれの作品から感じたこと、印象を大切にすること

② それぞれの作品に見られる形や色彩、構図、描き方などの造形的な要素における表現の違いを感じ方を確認する
→ ①との関連性

③ ②を基に、特に「ゴッホの作品から光の輝きや鮮やかさが感じられるのはなぜか」を探る

④ ゴッホの作品のよさや美しさについてまとめる。
→ ①～③の総括

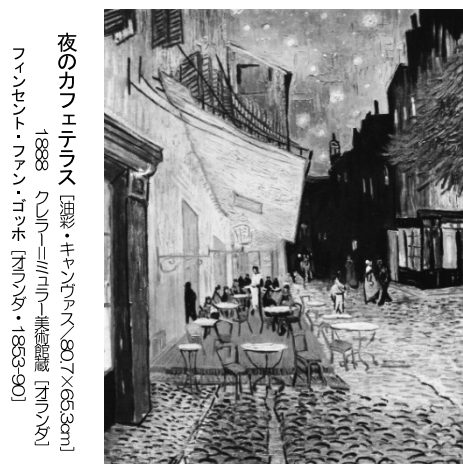
見方・感じ方の広がり

今日の授業の振り返り

(4) 配色の効果が実感できる資料の提示

第2次では、ゴッホの作品に見られる光の輝きや鮮やかさについて探っていくため、第1次での手立てに加えて、さらにゴッホの色彩の効果に気付くことのできる資料を用意する。「夜のカフェテラス」と比較鑑賞する「カフェ・コンソール」の図版だけではなく、第2時では「夜のカフェテラス」の空の青い部分を加工し、灰色にしたり、昼間のように黄色にしたりするなどした図版も提示することで、黄色・橙色と青色の組み合わせだからこそ光り輝き、鮮やかに見えることに気付かせるとともに、配色の効果が実感できるようにしたい。

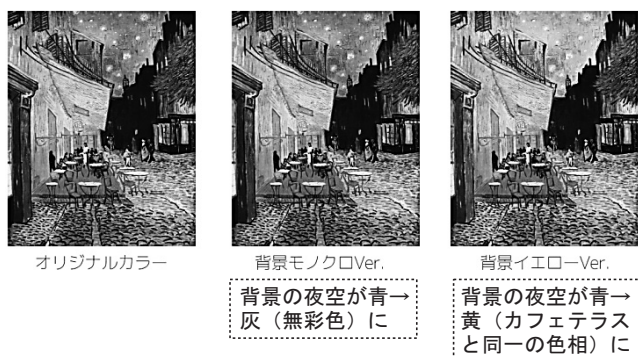
提示した図版は以下の通りである。



カフェ・コンソール
エドガー・ドガ
1876-77 個人蔵
グランド・シロ
1834-1917



〈第2次の第2時で提示したカラーバリエーション資料〉

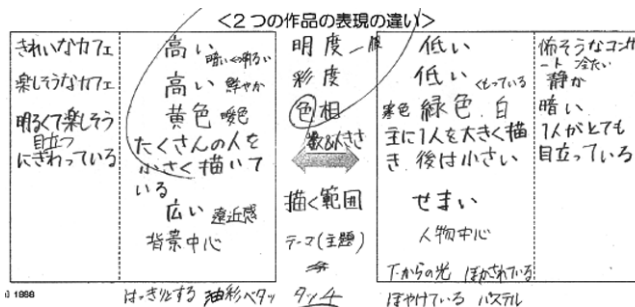
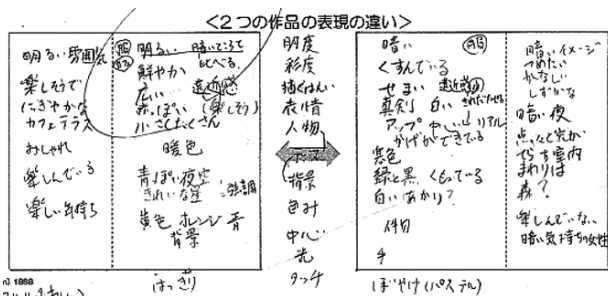


7 成果と課題

① 学習課題・問いの吟味

第2次の学習課題を「ゴッホの作品のよさや美しさとは何だろうか」とし、第1時では、ゴッホの「夜のカフェテラス」とドガの「カフェ・コンソール」を比較鑑賞して探っていった。まず、それぞれの作品から感じる印象やイメージをワークシートに書き出し、さらにそれらの印象やイメージが何から感じられるかを考え、ワークシートに書き出していった。その後、グループで意見交換を行い、互いに感じたことや見つけたことを話し合い、2つの作品について捉え方を深めていった。

以下は第2次の第1時で生徒が記入したワークシートの一例である。(左が「夜のカフェテラス」、右が「カフェ・コンソール」について)



ワークシートからは、生徒が感じたことや気付いたことをまとめたり、他の生徒の意見を聞いたりしていくことで、作品の印象やイメージと造形の要素を関連付けながら作品を捉えている姿が読み取れる。生徒は作品を造形的な視点から捉え、他の生徒の見方や感じ方に触れながら、それぞれの作家が何を表そうとしていたのか、自分としての意味や価値をつくりだしていったと考えられる。

全体発表の場では多くの生徒から、「夜のカフェテラス」からは「明るさ」や「光の輝き」、「鮮やかさ」などが感じられ、いろいろな要素の中でも色が関わっているという意見が多く見られた。そこで、第2時の学習課題を「ゴッホの色使いにはどのような工夫が見られるだろうか」とし、生徒には「どうして光の輝きや鮮やかさがゴッホの作品から感じられるのか」と問いかけ、色彩に視点を絞って作品を探っていくことにした。初めは個人で問いに対する自分なりの考えをもち、グループで意見交換した後、全体で考えを発表し合った。

以下は第2時の全体発表時の実際である。

M 特に街のほうで暗い色を使っているので、カフェテラスの黄色い明るい色がすごく目立っていて、光ってる感じ、鮮やかさが出ていると思います。
教 同じ考えの人はいますか？
K わたしもMさんと同じで、奥のほうで暗いおかげで、前の方の黄色などの明るい色が目立っていて、そこからゴッホの絵から明るいイメージが出ているなと思います。
教 付け足すことはありますか？
K それと空の色が鮮やかな青色を使っていて、そこからも明るいイメージが出ているなと思いました。
教 カフェ・コンソールの空は鮮やか？
T1 どんよりしている。
教 他に明るさについて付け足しはありますか？
A 私もMさんやKさんと同じで、カフェテラスの明るい色と奥の街の方の暗い色の反対みたいな関係をつかってることでカフェテラスがより明るく見えるし、奥の街の方もより暗くみえるから、カフェテラスの明るさがより引き立っていると思います。

この場面では、「明るさ」が、ゴッホの作品から光の輝きや鮮やかさが感じられる理由だと考える生徒の発言をつなげていった。「明るさ」について、繰り返しが付いたことはないかと問うことで、明るい色と対照的な暗い色があるからより明るく、より暗く感じ、カフェテラスの明るさがより引き立っているという、明度対比の効果を実感的に理解した発言が見られた。この発言から明度対比についてクラス全体で押さえ、自分たちが感じた印象やイメージが色彩の効果によってもたらされていることに気付けた。しかし、生徒の発言からも分かるように、明るさと鮮やかさを同じ要素のように捉えている生徒が見られたため、「明度対比をすると明るさとともに、鮮やかさもより感じられるのだろうか」と問いかけた。

以下はそれに対する生徒の発言である。

T₂ (「カフェ・コンソール」の白い光の部分指着して) ここが白色で明度が高い、(白色の周りの深い緑の部分指着して) で、こっちの周りの部分が明度が低くて、逆?・・・明度対比なんですけど、それで鮮やかだと思いますか?

教 鮮やかだと思う人、手を挙げて。
(誰も手を挙げない)

T₂ これを見ても全然鮮やかじゃないんです。(「夜のカフェテラス」の黄色く光る軒天を指着して) ここを見ても、ここ(黄色い軒天)とここ(街の影になっている部分→黒)で色が分かれていますんですけど、これだったらすごい光の輝きは伝わると言うんです。でも、これを見てちょっと鮮やかさに欠けると言うんです。明度対比によって鮮やかさは思えないな～って感じました。

この生徒は、明度対比によって光の輝き(明るさ)は感じられるが、鮮やかさは感じられないことを両作品の実際の色遣い(配色)から捉えていた。明度対比が即、鮮やかさにはつながらないことを自分なりの見方や感じ方で気付いたものであった。しかし、「鮮やかさ」がゴッホの作品のどこから生まれてきているのかを説明するものにはなっていない。

生徒の実態を捉え、育成したい資質・能力に応じた適切な学習課題を設定することの大切さが、この実践を通して改めて感じられた。特に、「問い」については、生徒の今現在の姿を捉え、生徒に何を考えさせたか、どこに向かわせたいかということを即時的に判

断し、生徒に適切な問いを投げかけることが必要である。第2時の授業では、生徒に問い続けることで色彩の効果について深めていくことができた部分もあるが、明度以外の色彩の要素や効果について気付かせるためには、生徒の発言に対する切り返しに課題があると感じた。T₂の「夜のカフェテラス」の黄と黒の配色では「鮮やかさに欠ける」という発言は、鮮やかではないという意味だったのか、「カフェ・コンソール」に比べると鮮やかだが、まだ鮮やかさは出せるという意味だったのか、生徒の真意を捉えるには、まだ切り返し方はあったであろう。また、T₂以外に「みんなはどう思う?」と問いかけることで、鮮やかさについての言及は出てきたかもしれない。指導者は生徒のあらゆる発言を想定して常に課題追究に向かう「問い」を用意しておく必要があると感じた。

② 配色の効果が実感できる資料の有用性

明度対比では鮮やかさを感じさせることはできないのではないかとこの生徒の発言が出たところで、「夜のカフェテラス」の青い夜空の部分だけ彩度を落として灰色にした図版を提示した。

以下は提示した資料を見た生徒の発言をまとめたものである。

- ・鮮やかさが半減した
- ・違和感がある
- ・黒と黄の配色のほうが鮮やかになると思ったが、青と黄の方がキラーンとした感じが出ている
- ・空が青の方が街の楽しい感じが出ていたが、灰色になるとにぎやかな感じが減った

作品の一部ではあるが、彩度が無くなることで鮮やかさが失われたり、明度の差が大きくなれば鮮やかさが増したりするわけではないことに気付く発言が見られた。また、鮮やかさが楽しさやにぎやかさなど、作品の印象やイメージの面にも効果をもたらしているという発言があった。そして、オリジナルの作品と空が灰色バージョンの作品を比較することで、次のような生徒の気付きがあった。

T₃ オリジナルの絵は、より色みが強い、くすんだ青でじゃなくて、青っぽい青が使われているので、明度に関係なく鮮やかに見える人に感じられるように工夫されているんだと思います。

ゴッホの作品から鮮やかさが感じられるのは、彩度の高い色を使っているためであり、ゴッホが見る人に鮮やかさを感じてほしいという思いからこのような工夫をしたのではないかと考えた発言である。

さらに「夜のカフェテラス」の夜空の部分で黄色にしたバージョンも提示したところ、生徒からは、より明るく見えるのは黄色のバージョンの方だけど、より鮮やかに見えるのはオリジナルの方だという意見が多数を占めた。その理由として、

- ・同じ色（黄色）を使いすぎても鮮やかには見えない。
- ・違いがなければ鮮やかさが感じられない。

といった発言があった。配色の効果を発揮させるには色が鮮やかであればよいのではなく、違いをすることが必要であるという気づきからの発言だと考えられる。

「夜のカフェテラス」のカラーバリエーション資料を提示したことは、夜空の色の違いによる感じ方だけでなく、配色によって表れる効果の違いを感じ取り、生徒の見方や感じ方を広げることに有効であったと考えられる。

③ 様々な資料を活用し、課題追究に取り組む

本実践では個人にカラーの図版を配布し、個人やグループ活動など、いつでも鑑賞の手がかりにできるようにした。

＜個人のカラー図版を用いて話し合う様子＞



どこから何を感じたのか意見を伝える際にも、言葉で言い表せないことを図版を指さして話すなど、互いに考えを共有する際に効果があった。同じく、全体発表の場では、電子黒板やタブレットPCを用いて、発表者の意見から全体で考えを深めていく上で効果があったと考えられる。

＜電子黒板とタブレットPCを使って考えを発表する生徒＞



また、教科書や資料集なども活用し、自分が感じたことや気付いたことが色のどのような性質や特徴に由来するのか、自分から調べる姿が見られた。

＜グループの意見交換で教科書で確認する生徒＞



自分の考えを補ったり、他に発信したりする手がかりとして、また、他の生徒の考えを捉えるために資料の活用は有効だったと考えられる。

④ 生徒が自分の感じたことを大切にして鑑賞活動に取り組むことのできる授業内容へ

次頁のⅠ～Ⅲは第2時の学習課題に取り組んだ後の生徒のワークシートの一例である。（左側「ゴッホの色づかいにはどのような工夫が見られるだろうか」に対する自分の考え、右側「ゴッホの作品のよさや美しさ」のまとめ）それぞれのワークシートからは、学習課題「ゴッホの色づかいにはどのような工夫があるだろうか」に対して、光り輝いて見える理由や鮮やかに見える理由を明度や彩度、補色等の対比によるものとまとめていることが分かる。生徒の感想からは、「漠然ときれいだと感じるところで終わっていたものが、なぜきれいなのか、明度や補色など色の関係性が

I ◎作品1 (ゴッホの作品) について考えよう。

ゴッホの色づかいにはどのような工夫が見られるだろうか。

背景の暗い色とくらべて「明度対比」夜空の星(光)がさびた色も鮮やか。色づかいが、光の明るさを際立たせている。黄色い光が、あたりに暖かさを与えている。黄色い光が、あたりに暖かさを与えている。黄色い光が、あたりに暖かさを与えている。

今日の授業の感想を書こう。

II

ゴッホの色づかいにはどのような工夫があるだろうか!

ドカノ作品と比べると、明度の差がとてはまきりしている。ゴッホが使っている黄色とドカノ使っている黄色に、それほど大きな明度の差はないがゴッホの作品は暗いところより明度の低い色づかいをしてるため、光がよく際立って見える。また、使われている色の種類もドカノと比べてたくさんある。どうしてゴッホは、このように色づかいをしたのだろうか。

今日の授業の感想を書こう。

III

ゴッホの色づかいには、どのような工夫が見られるだろうか。

暖色と寒色を使うことでよりカフェテラスの明るさが伝わる。背景は寒色、メインのカフェは暖色にする事で、暖かさが伝わる。暖かさが伝わる。暖かさが伝わる。

今日の授業の感想を書こう。

ゴッホの作品のよさや美しさとは・・・

明度対比や補色の使いか。より彩度を表すために使った。これと組み合わせることによって、絵の楽しさや鮮やかさを表現できたのだと思う。雰囲気。

ら考えることができ、このような視点をもって作品を見る大切さが分かった。」、「絵をじっくり注目してみると、ぱっと見では分からない、明度や補色の対比を使った工夫が読み取れた。そして、日常の美しさや楽しさ、暖かさなどのゴッホが表したいことも読み取ることができた。」といった感想が見られた。生徒はこの授業を通して、特に色彩に関する造形的な視点を豊かにし、自分の見方を広げることができたのではないかと考える。一方で、今回の授業実践は、作品を造形的な要素で捉えることに偏っていた面もある。上のワークシートのⅡやⅢには「いきいき」や「にぎやか」といった記述が見られる。なぜいきいきとして感じられるのか、なぜにぎやかに感じられるのか、美術科の本質として、作品から感じられることを造形的な視点で

捉え、さらに自分としての意味や価値をつくりだすことが必要である。生徒一人一人の感じ方、鑑賞を通してどう感じていったかが引き出していける学習内容、学習過程・方法、学習課題を考えていくことが必要である。

(授業者：萩原至道)

引用・参考文献

- 福本謹一・村上尚徳編著「中学校新学習指導要領の展開 美術編」明治図書出版、2017年
- 東良雅人他「特集 新学習指導要領解説・中学校編」教育美術 (No.907) 教育美術振興会、2018年
- 福本謹一「美術科の資質・能力を育成するビジョンを明確に」中等教育資料 (平成29年9月) 学事出版株式会社、2017年
- パスカル・ボナフー「ゴッホ 燃え上がる色彩」創元社1990
- 園府寺 司「西洋絵画の巨匠② ゴッホ」小学館2006
- 安井裕雄「もっと知りたい ミレー 生涯と作品」東京美術 2014